

未来眼やまがた 第4回

松ヶ岡から文化・風土を発信

去る10月1日に公開された映画「蝉しぐれ」のメインロケ地となった鶴岡市羽黒町松ヶ岡は、庄内の近代の歴史において重要な役割を果たした場所でもある。今回は、松ヶ岡開墾場内にある本陣をお借りし、株式会社松岡物産社長の酒井天美さんに、映画「蝉しぐれ」、松ヶ岡の歴史を通じ、物質的な豊かさの中で忘れ去られた日本人の心について聞いた。

風情・情緒溢れる空間

町田 いよいよ映画「蝉しぐれ」が公開

酒井 天美（さかい・あまみ）

東京都生まれ。慶應義塾大学卒業後、財団法人致道博物館館長酒井忠久氏と結婚。（財）致道博物館常務理事。山形県文化財保護審議委員。松ヶ岡開墾場内にある『ギャラリーまつ』を主宰し、地元はもとより全国で活躍するアーティストを幅広く紹介している。平成13年、第21回伝統文化ボーラ地域賞を受賞。

されましたが、松ヶ岡には大勢の観光客が訪れているようですね。

酒井 おかげさまで、今年4月に一般公開したオープンセットは3万人を超えましたし、併せてオープンした「映画『蝉しぐれ』資料館」も1万6千人以上の方においでいただきました。中には、鶴岡から路線バスでいらっしゃる、全国からの熱烈な藤沢ファンも多数お見かけします。松ヶ岡が皆さまに愛され、大変うれしく思います。

町田 オープンセットにしても、資料館にしても、風情・情緒があっていいですね。

酒井 オープンセットは、2003年秋に、江戸時代の普請組屋敷を1カ月以上かけ製作し、完成後さらに1年を通して風雨にさらし、自然の風合いを加えました。春には屋根に草も生えていてびっくりしました。松ヶ岡開墾場の五番蚕室に開館した資料館の方は、木造の建物の中に、「蝉しぐれ」の映画のスチール写真や撮影のスケジュール表などが展示され、映画の雰囲気を感じられます。また、一般的に、映画とかテレビのロケがあっても、風景が映るぐらいで、地元の人と関わることは少ないのですが、今回は、松ヶ岡の子どもたち、青年会議所の人たちをはじめ、地元の人たちがたくさんエキストラとして参加しました。

町田 映画製作に携わったこと、オープンセットや資料館を見学で大勢の観光客が訪れたことで、地元の人が大いに自信を持つのではないかと考えています。案外、地元の方は自分たちが何を持っているのかわかっていなくて、外から評価されてああそうかなという面がありますから。

酒井 松ヶ岡に来られた方たちから「松ヶ岡にいると心がほぐれ、自然に戻っていくようで、本当に気持ちのいい所」と褒められると、地元の人も「そうかしら」と思うようになってきたみたいです。地元の人たちが、この映画づくりに関わったことで少しずつ変わってきていると感じます。やはり外からの刺激は大切だと実感しています。



松ヶ岡の歴史

町田 松ヶ岡開墾場は、当時の木造の蚕室5棟が現存し、国の史跡にも指定されています。また、つい最近では「松ヶ岡開墾場とその周辺」が、山形経済同友会の第3回「次代につなぐやまがた景観賞」の最高賞である県知事賞を受賞されましたが、保存していこうとしたきっかけは何でしたか。

酒井 松ヶ岡は、戊辰戦争後、自分たちの意図に反して賊軍という汚名を着せられた旧庄内藩士3,000人が、それを払拭するために、明治5年、当時の先端産業であった養蚕業に着目して原野を開墾し、開墾開始から5年間で10棟の大蚕室を完成させた場所です。こうした松ヶ岡を開墾した先人たちの歴史と精神を引き継ぎ、後世に伝えたいと願いました。蚕室が5棟残っていましたが、養蚕にも使われなくなり、関連の各事業体がこれを全部維持していくのは大変だから、せめて1棟だけでも残したいという考えから、昭和56年に社団法人を設立しました。当時製糸会社に勤務していた夫の酒井忠久が常務理事として、その仕事にゼロから取り組み、昭和58年に「松ヶ岡開墾記念館」を開設しました。そうしている間に、文化庁の方針が、お城とか神社だけでなく、産業に使っていた建物を活用しているものも文化財にしていこうということで、平成元年に、蚕室5棟と本陣の建物が国の史跡として指定を受けました。

町田 本陣は、明治5年、旧庄内藩士3,000人が刀を鋏に換え一丸となって開墾した際、集会所兼事務所となった所だそうですが、由緒ある建物ですね。

酒井 元和8（1622年）に庄内藩第3代酒井忠勝が庄内入部の際、居城鶴岡城が修復中の間仮御殿だったものです。その後、その内の一部を藤島下町に移し、藩主が江戸往復の際に「藤島本陣」休憩所として用いられました。そして、明治5年の松ヶ岡開墾事業開始に際して再移築して、以来、精神的なよりどころでもあります。江戸時代の建物が400年近く経って、今も使われているのは素晴らしいことだと思います。当時3,000人が開墾したのですが、ここに入って農業に専従したのは30世帯で、現在はその子孫が62世帯住んでいます。先祖の開墾の精神を受け継ぎ、長い年月苦難を乗り越えて、大切に守って来てくれたおかげで今日の松ヶ岡があります。

気節凌霜天地知

町田 これからの大きな時代潮流は、東京一極集中に代表される、資本の論理を貫徹する大都市中心主義を



町田 睿（まちだ・さとる）

1938年秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、株式会社富士銀行入行。同行取締役総合企画部長、常務取締役を経て、94年株式会社荘内銀行取締役副頭取就任、95年より現職。

採る地域と、300有余の藩が地域に責任をもっていた江戸時代のように、各々の地域が自立し個性を発揮していく地域に二極分化されると思います。ですから、庄内にとっては、戊辰戦争に敗れた3,000人が刀を鋏に換えて開拓に夢を託したという故事は大きな意味があると思います。

酒井 士族開墾というのは大体が、自分たちの食べる物をつくるというイメージがあるのですが、ここでお米をつくるようになったのは大正時代に入ってからです。自分たちが食べるために開墾したのではなく、産業を興すための開墾でした。松ヶ岡の人たちはまさしく筋金入りですね。ですから、目標達成のためには、貧しさにも耐えることができたのだと思います。当時の庄内の人たちもみんなが応援してくれたようでして、松ヶ岡の人たちも頑張っているから我々も頑張ろうと。そのパイオニア精神は、庄内の人たちのお手本ではなかったかと思います。

町田 本陣の部屋に松ヶ岡開墾場綱領が掛かっていますが、その5カ条の第1条に「松ヶ岡開墾場は徳義を本とし産業を興して国家に報し以て天下に模範たらんとす」と書いてあります。まさにこうした精神が庄内の風土をつくっているのだと思います。

酒井 これは個人的な営利を求めるのではなく、団結を固め、武士としての節義を失わずに事業に当たろうとの誓いです。一部の人だけがいい思いをするのではなく、全体をしあわせにしていこうという方向を向いています。公益学の根本もまさにこれですよ。今日



映画『蝉しぐれ』オープンセット

床の間に、「気節凌霜天地知（きせつりょうそうてんちしる）」という15代酒井忠篤公のお軸を掛けていますが、この「気節凌霜天地知」は西郷隆盛から開墾に取り組む旧庄内藩士に向けて贈られた箴言です。これは、困難辛苦に遭遇した場合、それを凌ぎぬく気概をもって取り組めば、天地の神もこれを知り応えてくれるという意味ですが、松ヶ岡の精神の根本となっています。

問われる日本人のアイデンティティー

町田 日本はこれから日本人のアイデンティティーが問われることになるかと思っています。アメリカ極支配と中国の急速な台頭の狭間にあって、しかも来年あたりから人口減少期に入って活力を失いつつある日本という国が、何を目指すのでしょうか。わが国は戦後、物の豊かさを求めてひた走り、一人当たりGDPでアメリカを追い抜いた時期もありました。しかし、物質的な豊かさだけでは、そんなに値打ちのあるものではないことも学んだのではないのでしょうか。そうすると、もう一回日本的な精神風土が見直されるように思います。

酒井 近年特に時代劇が評価されています。生き方が多様化し情報に振り回されている現代にあって、しっかりと信念を持って、堂々と生きている人を見ることで共感を覚えたり、何か安心感をもったりするのも知れませんか。「江戸時代は人が美しく生きた時代」と、映画「蝉しぐれ」の黒土監督はおっしゃっています。

町田 国際化していけばいくほど、ますます日本人って何か、自問せざるを得なくなります。国際連盟の事務次長を務めた新渡戸稲造の「武士道」は最初欧米人に向けたもので、その後日本で和訳が出版されたものです。とかく誤解されがちだった日本人というものをしっかりと欧米人にアピールしなければならない、それが武士道の本質だったようです。その意味で、日本人の精神文化がいかに優れているかということをもう一回自己認識しなければならないように思います。その象徴が「蝉しぐれ」などに十分表現されているので

はないでしょうか。

酒井 「蝉しぐれ」は藤沢ファンであれば、誰もが感動した作品と言いますが、確かに、その時代の日本人の姿に触れると私たちのDNAの中にある感動が呼び起こされてきます。それは、仕事に対する忠誠心、父を敬愛する気持ちや母親への感謝、あるいは罪人の子であろうとも変わらぬ友情であったりと、作品の中には日本人のもつ精神性が細やかに描かれていると思います。映画「蝉しぐれ」のポスターに「20年、人を想いつづけたことはありますか」というフレーズが出てきますが、欧米人はわからないかもしれませんね。何で奪わないのかと。そこが日本人とは違いますよね。20年間もきちんと人格を認めて、想い続けることができる日本人の素晴らしさを「蝉しぐれ」は教えてくれています。

松ヶ岡から文化・風土を発信

町田 20世紀は人間の数の増殖とそれを支える衣食住のバランスとしての経済学主流の時代で、物質的に豊かにならないと人間は生きていけないといったらえ方でした。一方、21世紀は、人間のあり方としての哲学とか文化とか宗教とか精神的なものが価値を持つ時代に移りつつあるように思います。その意味でも、庄内が長い間熟成してきた文化・風土をこれから発信していく必要があると思います。

酒井 「蝉しぐれ」も「たそがれ清兵衛」も両方とも

庄内賛歌ですよね。全国の方が庄内に注目する機会は、この時期を逃したら、なかなか巡ってこないのではないかと思います。皆で力を合わせて飛翔したいですね。20世紀は科学技術と経済が非常に発展した時代ではありますが、20世紀ほど戦死者が多い世紀はないといわれております。人の心を尊重し、平和の実現を21世紀は目指しています。そういう中で、文化を大切にすることが重要だと思えます。

町田 もともと庄内の文化は、黒川能にしても黒森歌舞伎にしてもすごくレベルが高いと常々感じていますが、こうした文化が長年培われてきたのも、酒井家歴代の藩主が善政をしてきたからだと思えます。また、酒井天美さんご自身も、平成13年に、地域の無形の伝統文化を支えてきた方々を顕彰する「伝統文化ポーラ地域賞」を受賞されておりますし、今回の映画「蝉しぐれ」では、ご主人が庄内ロケ支援実行委員会の委員長としてご尽力されております。まさに、ご夫婦で庄内の文化を発信されています。

酒井 ポーラ賞は、文化遺産を活用して伝統工芸や伝統芸能を紹介してきたことを評価していただきました。ギャラリーまつを10年以上無料で公開してきたこととか、国の史跡となった松ヶ岡開墾場を生かして、多くの方が楽しめる場を提供してきたこととか、コツコツやってきたことが評価されたのだと思えます。平成17年度まで19年間で500近い展示会を開催してきました。振り返ってみると、随分いろいろなことを企画してきたと思えます。何度も松ヶ岡に来ていただきたい、多くの方に松ヶ岡を知ってほしいという気持ちから始めた事業ですが、展示を決める苦労はほとんどしていません。人から人へのネットワークのおかげで、本当に楽しい催しを松ヶ岡でさせていただきました。

天地人

酒井 人生は巡り会いだと思えます。庄内に嫁いできていなければ会わなかった人、松ヶ岡の仕事をしてなければ会わなかった方たちに支えられて今日があります。松ヶ岡に映画のオープンセットを製作することになった経緯も出会いなので。黒土監督が口

ケハンで、松ヶ岡にいらっしゃった時に、夫の忠久が松ヶ岡の外れにある約1万坪のダダチャ豆畑にお連れしたことがきっかけでした。月山、鳥海山、金峰山が見渡せる場所で、そこには池があって、月山が映りません。私たちが一番好きところで、すごく大事に思っている場所なのです。雨の日だったのですが、雨でぐちゃぐちゃの畑の中に監督をお連れしたら、「もうここ以外絶対に考えられない。ここに、オープンセットを建てたい」と言われまして、それからはパタパタと決まっていきました。ひっそりと林に囲まれたところですから、あの雨の日に、もしご案内しなかったら、オープンセットは建っていなかったでしょう。物事が決まる時って本当に不思議ですね。

町田 天地人なのかもしれませんね。「天の時」、「地の利」、「人の和」。タイミングとか人とのつながりは大きなポイントになりますね。今、日本は間違いなく大きな時代の変わり目に遭遇していると思えます。ただ残念なことに、明治維新や太平洋戦争敗戦のように、誰の目にも判然と変化が見えるようになっていません。しかしながら、小さな政府をめぐる政治、デフレ脱却にあくせくしている経済、さらに少子高齢化の急速な進展で崩れつつある社会構造と、あらゆる分野で変化が進行しています。戊辰戦争に敗れた旧庄内藩士3,000人が刀を鋤に換え、開墾に夢を託し、激動の時代を生きた歴史は、庄内にとっての大きな財産であり、我々に大きな糧を飛ばしているように思います。本日はどうもありがとうございました。



松ヶ岡開墾場